

7 トビイロウンカの子察灯誘殺虫数と本田発生量

ねらいと成果

平成10年、西日本を中心に、トビイロウンカが多発し、本県においても県北部を中心とした広い地域で坪枯れほ場が多数見られたのは記憶に新しいところである。トビイロウンカは海外から飛来する成虫がその年の発生源となるが、飛来成虫の本田での生息密度がきわめて低いこと、生息部位が株元であることなどにより早期発見がむずかしく、被害が現れるようになってはじめて気づくことが多い。そこで、発生を早期に予測するため、予察灯への総誘殺虫数と本田における発生量との関係を検討した結果、6、7月における加西市と安富町の予察灯への総誘殺虫数から県南部の8月下旬、9月下旬の株当たり平均寄生虫数を予測できることが明らかとなった。

内容

平成元年から10年間の予察灯（60W白色電球）への月別総誘殺虫数と本田での株当たり平均寄生虫数との関係について県北部（但馬・丹波）と県南部（阪神・播磨・淡路）に分けて検討した。

県北部については、和田山町の予察灯への総誘殺虫数（6、7月）と8月下旬の県北部本田巡回調査（調査地点数32）に基づく株当たり平均寄生虫数との相関を、県南部については加西市、安富町、三原町の予察灯への総誘殺虫数（6、7月）と8月下旬、9月下旬の県南部巡回調査（調査地点数70）に基づく株当たり平均寄生虫数との相関を検討した。

なお、虫数は分散の影響を少なくするため、調査値を対数変換した値を使用した。

その結果、和田山町の予察灯への6月の総誘殺虫数と8月下旬の県北部株当たり平均寄生虫数、加西市の予察灯への6、7月の総誘殺虫数または安富町の予察灯への7月の総誘殺虫数と県南部8月下旬、9月下旬株当たり平均寄生虫数、三原町の予察灯への7月総誘殺虫数と県南部9月下旬の株当たり平均寄生虫数との間にそれぞれ有意な関係が認められた（表）。

このことから総誘殺虫数を独立変数とし、平均寄生虫数を従属変数として回帰式を求めると加西市・安富町の予察灯への総誘殺虫数から県南部ほ場での平均寄生虫数が推定できる（図）。

今後の方針

栽培型、気温など本田での増殖に関する各要因を解析し、発生予察情報の精度をより高める。

表 予察灯総誘殺虫数と株当たり平均寄生虫数との関係

予察灯場所	誘殺時期	県南部 ¹⁾ 株当たり平均寄生虫数	
		8月下旬	9月下旬
和田山町	6月	0.755*	—
	7月	0.495	—
加西市	6月	0.750*	0.677*
	7月	0.746*	0.807**
安富町	6月	0.239	0.612
	7月	0.924***	0.775*
三原町	6月	0.038	0.122
	7月	0.581	0.688**

¹⁾ 和田山町のみ県北部株当たり平均寄生虫数
 数値は相関係数。*5%水準で有意 ** 1%水準で有意
 ***0.1%水準で 有意

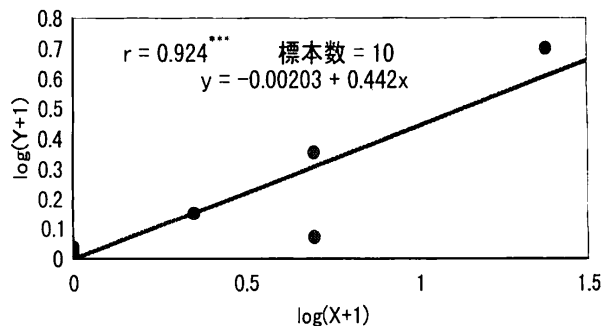


図 安富町7月総誘殺虫数(X)と県南部平均寄生虫数(Y)との関係

廣瀬 敏晴（病害虫防除所）